
VIP達の福音書

深夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VIP達の福音書

【著者名】

Z6557D

【作者名】
深夜

【あらすじ】

『銀行員の恋』外伝。田原聰が出会つVIP達との想像を絶する世界。短編から連載に変更しました。作者は怪しいが、読者はもつと怪しい。。。

第1節 犬井夫人伝

第1節 犬井夫人伝

当行でも5本の指に入る純預金先の犬井氏。

その妻である和子さん（仮名）65歳の趣味はサイクリングだ。

『銀行と自宅の往復』という恐怖の物語・・・（おいおい）

自転車の名前は【ろつてんまいやー号】紺色のママちやり。

その他に、恥ずかしくなるくらい真っ赤なフェラーリ仕様の

【あーでるはいど号】も所有しているが、常には前車を愛用している。

そして、犬井夫人には相棒がいる。

バグ犬の『ちびすけ』年齢不詳。

以前、自転車の力でから鞄をひったくられた経験があり、

番犬として犬を相棒にしているらしい。

鞄は番犬『ちびすけ』と繋がっているが、

クサリを飼い主が持つていてるわけではない。

つまり、ストラップなのだ。（謎）

外出は銀行への来店のみと噂のあるVIP犬井夫人。

買い物はお手伝いさんがやつてくれるらしいのだが、お金のことに関しては、すべて自ら行動するんだ。

今日も愛車【わくでんまいやー号】にまたがり当支店にいらして下さい。

ここからVIPの威厳をまざまざと見せ付けられる事になる・・・・

まず、正面玄関に自転車横付け。

支店には、自転車駐輪場があるんだ。

大抵の人はそこに自転車やバイクを駐車するんだけど・・・・

犬井夫人も、自転車は駐輪場に止めるのだけれども、

その前に、用事を済ませるんだ。

窓口カウンターにバッグと鞄を置いて、その後、自転車を駐輪場に移動させる。

最初にこれを見たときの衝撃は、一生忘れないだろう。

そしてひとり（一匹）残されたパグ。

いつもテラーの女の子を見て『にやつ』と笑う。

『ふふふうううううう

ふふふうううううう

ペットは飼い主に似るというけれども、

犬井夫人とパグ犬『ちびすけ』は凄く似ている！

両方から見つめられると双子と見間違えそうになる（おいおい・・・
）

この人にまつわる数々の伝説が今明かされる。

犬井夫人は毎日銀行にやつてきます。

宵越しの現金は持ち歩かない主義（謎）といつ犬井夫人。

毎日の日課である『サイクリング来店は決まって現金の払い出しだ。

その来店時間は、きまつて午前10時なんだ。

銀行ではもつとも忙しい時間帯なんだけれども、

来店時刻は目覚まし時計よりも正確なのだとか・・・・

【ある月末】

通常よりも多い来客で、窓口が込み合っているが、

そんな事は大井夫人には関係がない。

いつもの如くパグを窓口に置いて一人去っていくんだ。

忙しい女の子は、

『おいくら払い出しましたか?』

事務的にお伺い。

『わん!』

窓口にはパグしかいない・・・・

『1万円ですね・・・・』

・・・・用事は済んだ。

【怪我をしたパグ】

ある日の来店時、パグは怪我をしていたんだ。

なんでも骨折したらしい。

普通の犬ならばかわいそつとも思えるのだけれども、

常に鞄のストラップにされている事を考えれば、

左足の包帯は、アクセサリーにしか見えてこなくなる（「めんね・・・」）。

いつもの如くカウンターに置き去りにされるパグ犬『ちびすけ』

よほど痛かったのか、叫び声をあげるんだ・・・・・

『ハナシ』――

『改印ですか？』

女の子は真面目に答えたのだといつ・・・

【印鑑变更】

今日はなにやら怪しげなチラシをもつて犬井夫人ご来店。

パグもあいかわらず元気な様子だ。

パグの表情を見れば、犬井夫人の機嫌もわかる。

アメダスレーダーより正確なのだとか・・・・

怪しげなチラシの正体は、

よく新聞の折込なんかで見かける、金運上昇をうたつた印鑑のものだつた。

聞けば、今日届いたとの事で、早速改印手続きしたいとの申し出。

・・・・・はじめて見た。

「の手の広告から」「この買つた人。

たぶん、この人の家にある壺とか財布なんかは、

全てこんな感じのものなんだろうな（汗）

でも、お金は確かに持つてこらつしゃるのだから、

効果はあるのかもしれない（おおおお・・・・）

『では、この押印ください』

受付窓口の女の方は、マニコアルビおつる素晴らしい対応。

しかし・・・・印鑑を押すところに、勢いあまって【肉球】押印。

『やあんー』

・・・・・・・・・やんと拭いてあげるよ。

【支店開設30周年】

当店は支店開設30周年を迎える記念の年であった。

創立記念の来店感謝デーを企画する事になり、

ギャラリースペースに開店時の写真を拡大し展示する」となった

んだ。

最近のデジタル技術はすばらしく、ネガが無くとも、簡単に古い写真から引き伸ばせるんだ。

その中の一枚から、若かりし頃の犬井夫人を発見したんだ。

さすが、30代。今では面影すらないが（失礼）

当時であれば、ちょっと街で振り向かれるほどの大美人だったんだな・
・・・

イメージの違いに驚愕したんだけど・・・

原版ではわからなかつた写真だったが、拡大してさらに驚く事になる。

『パグもいたあ！――！』

【眼力】

今日も【ろつてんまいやー号】は快調だ。

カウンターにパグを置いて立去つていく犬井夫人。

その日は、本社から窓口事務指導で、ベテランの女性指導員が来店していたんだ。

なんでも、頭取の血縁関係にあるとの噂で、

うちの銀行では彼女に楯突く人などいないので。

カウンターに犬を置く。それをみちゃった指導員。

『犬を置いていかないでください！！！』

大きな声で注意しちゃつた・・・・

そして、犬井夫人の目が光るんだ。

・・・・・・次の週、指導員は関連会社に飛ばされた。

これがスーパーVIPの眼力か！

明日は我が身と震えだす。

第1節 犬井夫人伝（後書き）

この物語はファイクションです。

第2節 住職伝

第2説 住職伝

真宗山派 愛染山高福院。

僕の取引先に、御年80歳を越えているけど、いたって元気な、住職がいるんだ。

先輩銀行員から、『住職の担当を引き継いだと、

『話し好きで時間かかるから、忙しい日は注意しろ』

なんて申し送りを受けたのだけれども・・・

幼少期に夏休みといつと、真言宗の親戚のお寺に修行に出されていた僕は、

『住職の説教なんてものは決して嫌いではない。

だから僕が担当してから、取引は急速に拡大して、

当店でも屈指のVIPとなつたんだ。

『ウチの財産管理は田原さんに全部任せると。』

銀行員として、お世辞でも嬉しいのは「信頼」の一文字なのだ。

ある日、『住職から訪問依頼の電話が入る。

なんでも火急の用件なのだとか・・・・・

忙しい日ではなかつたけれども、別件の用事があつた為、

1時間ほど経過した後訪問することになつたんだ。

『『じめんください』

予定時刻を少し過ぎただろうか。

急いでいるお客様を待たせるのは、いつもながら気が引ける。

待たせる時間と、待つ時間では明らかに感じる時間のスピードが違うのだから。

庫裏くりの玄関から、奥の部屋で何人かの檀家の人達と、

話し合いをしている住職の姿が見えた。

なにやらガラス越しに見えるお客様さんの顔は皆真剣そのものなんだ。

場の空気を読み間違えると大変だという事は、

銀行員になつて嫌といつほど味わつている。

この話し合いの為に、僕のことを待つていたのだろうか・・・・・

それとも、僕にまったく関係ないのであれば、

話し合いに水を刺す事になるな・・・・・・

でも電話で訪問依頼されたのだから、挨拶もしないで帰る訳にも行かないんだ。

『「めんくだわいーー。』

こんどは大きな声で叫んでみた。

部屋にいた全員が僕のことを振り返る。

すると『住職。

『あー大切なお客様だから・・・・・

しまった・・・・場を読み違えたかなあ。。。

大切なお客様が居るって事は、時間をずらすくらいの気配りが必要だったのかも。

僕もまだまだだな・・・・なんて瞬時に後悔したんだ。

『大事なお客様だから、みんな帰つてくれ!』

すると、一斉に席を立ち始めるお客様達。

あれ?

『帰れ』って、僕じゃなくてお客様にだつたの???

僕は入れ替わるよつて、先程までお密がいた部屋に通される。

『するととにかく、『住職は慌てて片付けをしてくるのだ。

『いやいや、お忙しい所申し訳ない・・・』

お密を歸すほど用件だなのだ。

事は急を要する事なのだろう。

ん? なにか落ちたが・・・・・・

半紙に見慣れない文字でなにか書いてある。

これは・・・・・サンスクリット語?

かつ、戒名じゃないか! ! ! !

とこいつとは、今のお密つて。・・・・・

『急に葬儀が入る事になつてな・・・・・』

・・・・・住職。

葬儀よりも急ぎの用事つて・・・・・・(汗)

『実は・・・・・金庫が開かなくなつての・・・・・』

『金庫・・・・ですか?』

聞けば、かつてウチの銀行から貰つた（貰つた?）金庫がお寺にはあるのだと言つ。

その金庫は、最近まで何事も無く使用していただけれども、

突然に開ける事が出来なくなつたとの事。

『金庫の故障』だけならば、まったく銀行とは分野の違う相談だ。けれども、取得したのが銀行の名前が出た以上、放つて置くことは出来ないんだ。

金庫のダイヤル番号メモはあるようなので、

本当に故障か否か確かめる事にしたんだ。

『でかつ！……』

金庫は予想以上にでかかつたんだ。

これは昔銀行で使用していた金庫に違いない……。

本尊地下の秘密の部屋（僕も知らなかつた）にその金庫は鎮座していた。

なるほどビ、ここなら泥棒でも躊躇することだらう（汗）

家庭用の大きさではないプロ用の金庫。

これと同様なものを、他のVIPモードで見た事があった。

銀行払い下げのものだと聞いた記憶がある。

ダイヤルメモ通りに動かしてみるが、まったく金庫は反応しない。

『これじゃ、僕の手におえないな・・・』

銀行の金庫を管理している業者宛連絡する事にしたんだ。

そして事が事だけに、上司に相談して銀行員2名立会いの元、

業者とあらためて訪問する了解を得て、その日は立ち去る事にした。

・・・、『住職、檀家人待ってるから、早く戒名考えてね（汗）

そして、翌日・・・

業者の人があつてきた。

『ビニのメーカーの金庫ですか？』

『・・・わかりません。間違いなく戦前のものです。』

『・・・』

ひきつる業者を尻目に、『住職の金庫に再挑戦だ。

昨日のダイヤルメモを渡して調べてもうひ。

『…………この番号は間違っていますね』

『えつ、壊れているんじゃないんですか？』

『見る限り正常に作動しているようですが……』

意外な答えだった。

じゃあ、このダイヤルメモってなんなのだろう。

『「」住職、ダイヤルメモ違つてるみたいでしけど……』

『んん？じや、あつちの金庫だったかな……』

・・・・・まだ僕の知らない隠し財産があるのか（汗）

結局、問題の金庫のダイヤルナンバーは不明のままだった。

メーカーも、こつこつては検索できないらし。

すると、ここで金庫のプロの技を見せ付けられる。

『4桁のダイヤルであれば、最初の番号を特定できます……』

『本当にですか？』

詳細は犯罪に悪用される恐れがある為、書く事が出来ない。

しかし、単純であるけど田からウロコのテクニックによつ、

数字の1桁目が判明したんだ。

『住職、この続きを覚えてませんか?』

『…………わからん…』

…………威張るな。

『じゃあ、お任せください…………』

またまたプロの技が炸裂する。

古い4桁のダイヤル式金庫は、

ある特定のパターンしか数字の組合せが出来ないらしい。

この金庫の最初の番号から推定するに、

36通りのパターンがパソコンから予想された。

『これを全通り試みて見ます。これで開かない場合は金庫を破壊します…………』

『おお、破壊僧と呼ばれているだ

…………それは当たつているだろつな。

『力チャヤー!』

1回目の番号を試してみると、金庫は何事も無かつたかのように開

いたんだ。

その場に居合わせた住職以外の全員が驚愕したんだ

ます
せかぐ出できたものは
・・・・・

金庫のタイヤ川メモ

これにや
しくは探しておいたが、なあ

・
・
・
そして

〔大束8〕

（一）現金8千円

住職

これは、個人がもつていていい金額ではないのだと延々説教する。

またぐ
とせらか住職たのたか
..
..
..
..
..
..

金利がいくら低いとは言え、銀行の預金は安心なのだ（防犯上ね）。

大束（一千万）を金庫といえど無造作に置いて置くのは無用心極まりない。

インフルになつたら必ずあるつもりだつたのだひつ。

銀行の通帳に入金しなさいと諭された『住職。

現金で手持ちにするリスク。

目の前に積まれた大束を前に、よつやく安堵の表情を浮かべ、
快く通帳入金に応じる事になつたんだ。

帰り際、『住職が僕に一言お礼をしたんだ。

『田原さん、ご親切にありがと。生き返つたようだよ……』

『半分棺桶に足突つ込んでるべせ……』

『謎を聞きつけやつてきた奥さんにも現金の事がばれてしまつた。

この後の『住職の身の安全が不安でもあつたんだけど……』

奥さんに聞こえないように、僕に耳打ちして見せる『住職。

『やつぱり、現金じゃなくて、インゴット（金の延棒）のほうが良
かつたのかな？』

宗教法人は非課税である。

坊主丸儲けとは良く言つたものだ……

第2節 住職（云）（後書き）

この物語はフィクションです。

第3節 毒饅頭伝

菓匠千寿庵。

老舗の菓子店舗にはVIPが多い。

戦後、甘いものに餓えていた時代。

いかに闇物資を確保できたかが、『老舗』を繁栄できたかという歴史であるのだと、

先代千寿庵当主である橋宗右衛門氏（82歳）は語る。

千寿庵名物が、皮と餡に味噌を練り込んだ『味噌饅頭』。

1日3千個は売れるといわれているこの饅頭のおかげで、

千寿庵は、県下に10店舗の支店を開設し不動の地位を獲得している。

そんな千寿庵は、5年前からネット株式を始める等、

チャレンジ意欲と資産運用は旺盛。

千寿庵の社員からは『饅頭じいちゃん』の愛称で呼ばれているんだけど・・・。

銀行員にとっては、【毒饅頭】と称されるほど恐れしゃべるHPなのだ。

『おせよハヤシヤコモト』

朝一番で訪問して欲しいとの電話依頼があり、さっそく僕は向うん
だけど・・・・・

『遅いー。』

開口一番遅いと言われるのでは、今日の訪問も思いやられるだろつ。
僕が『隠居にお邪魔したのは、電話から5分も経っていない時刻な
のだから・・・・・

『一の橋宗右衛門、一度たりともお密を待たせた事は無いぞー。』

これは、怒られたのではない。

お約束の【今日の挨拶】である事を、僕はよつやく理解することができ
出来た。

この後のフレーズは、一度や一度聞いたことのある、

『橋宗右衛門波乱万丈の歴史』である事は間違いないのだ。

休憩中は時間の進行が早いのに、仕事中は時間が遅く感じる・・・・・

それが極端になっているのが【毒饅頭】ワールドなのだ。

それだけ、僕の訪問を心待ちにしていたとの証明なのだ。

こんな事へりいで怒つてゐるのでは付き合へきれない。

それ以上に、支店の収益ではトップに粗體するほどの大ヒットである。

多少の事は許されるべき『お密様』なのだから……

『今日は、ひょっと頼みがあつてな……』

・・・・・・・・少なくとも、人に物を頼む態度ではない。

『これを見てくれ……』

『なんでしょうか?』

テーブルの上に、スーパーのロゴが入ったビニール袋が置かれている。

だいぶ懶らんでいるから、中に何か入っている様だけれども……

2重になつて縛られている袋を開けてみると。

『…………』

『ひとつひとつ詰めておいたんだがの……』

『一ひとつひとつ……小判ですか?』

『ああ。これで100両。』

・・・・・・江戸時代じゃないんだからさあ。……。

『これ、いつたい現在のお金でいくらにするんですか?』

『・・・・・知らん。』

『だいたいそれは田原くんの専門分野じゃないのかい?』

『銀行で、小判は取り扱つてませんよ・・・・』(汗)

銀行で金貨は扱えるんだ。

『円』以上の貨幣なら換金する事は出来る。

けれども、金貨の額面以上の価値があるのだから、

銀行で額面両替しようとする人なんて絶対いない。

10万円硬貨が偽造された時代があつたけど、

それは当時の金価格が低かつたからなんだ。

現在では、金の価格は上昇していく、

それに伴い10万円硬貨の価値も上昇している。

だから、本物の金を使って偽造するなんて事はありえないのだ。

偽造が出回った時、大量の10万円硬貨が銀行に戻つて来たのだけれども、

『あの時両替しなければ・・・・・』

と悔しがる人は、これからも確實にふえるだらうな。

『・・・・・これは享保小判ですね』

『さすが、知つておるな』

時代が享保以後、金の含有量が極端に悪くなる。

だから、享保以前の小判は価格が高いってことだけは、

銀行員の雑学で知つていただけだ・・・

『1枚20万の捨て値で考えても2000万ですか?』

『骨董的価値から言つと、1枚30万はするじやう・・・・・・』

・・・・・『隠居、やつぱり価値知つてんじやん。

僕を試したこと気に気がついた。

これだから、VIPは気が抜けない。

ボケた振りをして、相手を観察しているなんて事は良くある話なのだ。

『つまり、菓子金庫・・・じやなかつた、貸し金庫にお預かりつて事ですね。』

『さすが、飲み込みが早いの・・・』

それを商売としてやっていますから。

でも、これって今までどにに保管していたんだひうな?

『「」隠居、これなんどペニール袋に入れてるんですか?』

『ああ、濡れない為じや。』

『濡れないって・・・。』

『庭の木の下に埋めておったからのお。』

・・・・・『徳川埋蔵金』 いこありました。

『しかし、もう一〇〇両隠しておると思つてたんじやが、見つから
なくてのお。』

(・・・ ! !

饅頭じいちゃん埋蔵金伝説。

菓匠千寿庵、トレジャーハンター急募。

第3節 毒饅頭伝（後書き）

この物語はファイクションです。

第4節 御側用人伝

骨董好きで有名な大口預金先の加納さん。

当店でも屈指の預金高を誇るVIPである。

なんでも先祖は徳川家に使えた御用人、加納主税の血筋なのだと言う。

担当者であれば、一度や一度耳にする事になるのだ。

もつとも、徳川家の歴史にその様な人物は登場しないのだが・・・

その事を指摘してしまうと、

『我がご先祖は、【隠密】お庭番の出である』

と、先祖伝来の刀、【栗田口国綱】一尺一寸余】を振りかざしながら向かってみると、

前担当の先輩から引継ぎされた。

『命が惜しかつたら、否定するな・・・』

いまだこのセリフは耳に残っている。（恐ろしい）

ある日の訪問時、僕はいつもより座敷に通された。

でも、その辺はいつもと違っている事があつたんだ。

加納さんが、なにやら真面目な顔をして何かを手にしている。

•
•
•
ん?
.

しつしつしつ・・・真剣?

鈍い光を放つその物体は、紛れも泣く日本刀！！！

まさか、僕を刀の鍛にするつもりじゃ

・・・ そういえば、先月契約した投資信託は元本割れてたな。

『ちよつと待つててくれるかい?』

ゆうくりとした口調で答える加納さん。

どうやら、こ立腹して刀を取り出したわけじやなさうだつた。

いきなり切りつけられる可能性は回避された。（おいおい）

なんでも近々地元博物館の刀を展示するイベントに

愛蔵の方を数本出展するらしい。

僕がお邪魔したタイミングは、その為の準備中だった訳で

テーブルに刀が10本程並べてあつたんだ。

『栗田口国綱ですね・・・』

VIPは骨董好きの人が多い。

銀行員は広く浅くの多方面の知識を持つものが、セールス勝者となり得る。

僕は骨董・美術品関係もある程度の知識をセールスの手段として心得てある。

趣味の話題。これほど確実な切り口はないのだ。

『一・?』

『あれ・・・栗田口じゃなかつたですか?』

『田原くん、刀に詳しいのか?』

『いえ、知識としては全くですが、池波正太郎が好きなんで・・・』

『

栗田口国綱は、鬼平犯科帳の長谷川平蔵が所有していたことで有名である。

学生時代、池波文学が好きで読みあさった事があり、名前だけは覚えていたんだ。

そして、その刀が加納家に所蔵されている事は先輩からの引継書に記載されている。

重要刀剣に指定されているのくらいの家宝なのだから、

数ある刀の中で、一番丁寧に扱われている物が栗田口国綱だつて事は予想できた。

決して刀の刀紋を一目見て判断した訳じゃなかつたんだけど、

加納さんは僕がそんな単純な理由で刀を見極めたのでは無いと思つたらしく・・・

『じゃ、これを見てくれ!』

出でくる出でくる・・・

これは日本刀の製造工場か! つてくらいの刀が蔵の中から御登場。

加納さん、むかし五条大橋で刀狩とかしてたことありますか?

僕の刀の知識なんて、銘を見れば少し時代がわかる程度しか持ち合わせていない。

実物を見て勉強したのではなく、VIP用の小手先の知識として、

本を読むことでしか習得していないのだから。

まづい、馬脚を現したら切つて捨てられるかも・・・

加納さんは既に刀の世界に逝つてしまつたようだ(失礼)

まさに妖刀の魔力つてヤツだな・・・

これ以上『ディープな世界に連れて行かれる前に、なんとか切り返さなくては…』

『すばらしく趣味ですね、加納さん。』

『わざわざ、刀は持ち主を選ぶといつからな

・・・すいご由々

『あともうひとつ私には趣味があつてね。』

『骨董は全般的に収集されておられると聞いておりますが・・・』

『骨董じゃなくて食べるほうなんだよ。』

由々の頂点を迎えた為か、なんとか話題の方向をすゝめる事が出来た。

食べる方ならば、骨董より僕の得意の分野なんだ。

ほつと一安心するんだナビ・・・

『どうかな？田原くん。もうすぐお昼だから、私の腕前披露するけ

ビ

『食べるほうじゃなくて作るほうですか？それは楽しみです。』

今日は時間が融通効く日でよかったです。

なにが出来るのかと、日本刀だらけになつたその部屋で待つ事9

0分。

『おまたせしたねえ。』

『ええ、本当に待ちました！』　言えない。

なんと、大量の手打ち蕎麦が出てきたんだ。

10人分くらいあるだろ？　か・・・

『全部食べていいから、ささつ遠慮しないで・・・』

・・・これを僕一人で全部食べろってか。・・・

完食しないと預金が逃げるかもしだれない恐怖と戦いながら、

1時間かかってたいらげる。

・・・しばらく蕎麦は見たくないな。

『いやあ、「ちやう」になりました。とても美味しかったです！』

・・・それしかコメント仕様が無い。

『いつから蕎麦打ち始めたのですか？』

僕は最後の気力を振り絞り、セールストークに徹する。

『先祖伝来だからな』

『・・・はつ?』

意味がわかりません。

『側(蕎麦)用人の家系であるからの・・・』

思わず後に倒れ込む・・・

第4節 御側用人伝（後書き）

この物語はファイクションです。

第5節 【Bar A waist curves】

当地でも有数の資産家と言われている小村三十郎氏（72歳）

当行との取引はほとんど無かつた為、

僕は取引拡大を目指してセールス訪問するようになつた。

資産家と呼ばれるお宅には、当行だけではなく数多くの金融機関が出入りする。

当然金融機関同士の競合がある訳で・・・その中に入り込むのは簡単ではない。

そんなVIP攻略の鍵は、奥さんにある場合が多い。

どんな家庭であつても、財布の紐は妻が握っている事が多いからだ。

小村さんを良く知る取引先社長から、奥さんの趣味はクラシックだと聞いた僕は、

訪問時のセールストークの組立てを、この線から当たりうつと決めていた。

そしてある日、小村家にセールスの為、訪問してみたんだけど・・・

『おつ、誰かと思えば田原君じゃないか・・・』

先客がいた。

あんしん銀行取引先の、某社長がお帰りする所だった。

『小村さんと取引あるんだ』

『これからお取引頂戴したいとお願いにきたんです・・・』

それじゃという事で、取引先社長から小村さんに僕の事を紹介頂いた。

『紹介』があると無いのでは、締結の確率はまつたく違つてくれる。思いがけない助力を得た僕は、ほとんど渋ることなく取引獲得することができた。

『社長、先日は小村様に『紹介いただきまして、ありがとうございます』

次の日、早速紹介してもらった社長宛お礼に伺う。

頂戴するだけではなく、いつもお礼をすることだが、次のセールスに繋がるんだ。

『いやいや、私はなにもしてないんだけど・・・』

『・・・けど..』

『かえつて田原君が苦労するんじゃなかつたかつて、あれから考え

てたんだよ・・・』

口を濁す社長。『苦労する・・・つてのは、ビリコツ事だらうか。

『まあ、そのうちわかるとは思つが、【Bar Awai st
cure vs】には注意するよ』・・・

バツの悪せつな感じを受けた僕は、それ以上聞かないと決意した。

気をつける対象が、『Bar』という事は、飲み屋なのかな？

小村さんが副業でスナック等経営している事は考えられた。

でも、お酒の飲めない僕にしてみれば、関係の無い事であつて・・・

飲み代が高いから、行かないように程度の忠告だと思つたのだ。

取引開始から数ヶ月が過ぎたある日。

小村さんは定期的に訪問できるくらいに取引は拡大していた。

奥さんの趣味であるクラシックは、鑑賞するだけではなく、

唄ひほづの声楽が得意である事がわかつたんだ。

時折仲間とともに『Bar』サートを開くなんて聞いたから、

『今度是非お誘いください・・・』

セールスとしては間違つていかない答えたつたと今でも思つてこる。

小村さん宅で、V.I.Pコンサートを開催すると連絡を受けたのは、

それから間もなくした日のことだった。

楽しみにしていたわけじゃない。

これも仕事なんだとそれ以上の感情を持つ事なくお邪魔する事にしたんだ。

午後7時から自宅蔵を改造したホールで行われるところコンサート。

僕のほかにも8名程が集まるとの事。

V.I.Pの人脈はV.I.Pである事が多いためだから、僕にとつても気が抜けない。

僕が飲む事の無いワインを持参して戦闘態勢で小村邸に出陣する。

『あら、みなさんお待ちかねですよ。』

笑顔で迎えてくれた小村夫人。

その姿は、宝塚のレビューかと見間違えんばかりの艶やかな衣装を身に纏つている。

『始まる前に、ちょっとお酒でもどうぞ・・・』

飲めないと言えない状況にあるなと感じながら、

屋敷の裏手にある『蔵』を改造した音楽ホールらしき建物に案内される。

埋め込まれている。

Bar A waist curves

突然背筋に冷ややかなものを感じる。

重厚な扉が開かれ、僕はなにやら得体の知れない空間に放り出される感覚に襲われる。

中では何が僕を待つているのだというんだろう。

もしかして、新手の宗教勧誘か？

いや、そんなものじやなく秘密の儀式に生贊として招かれてしまつたんじやないのか？

不安は一気に膨らんだ。

蔵の中は20畳ほどのスペースがあつた。

中央にグランドピアノが置いてある。

小村夫人の伴奏に使うのであるつか・・・

品のあるピアノと、ショットバーを思わせる雰囲気あるバー・カウンター。

お酒の種類も、ちょっとしたショットバーよりもいんじやないかと思われるほど

充実しているのだ。

なるほど、これが『Bar』たる由縁なのかな・・・

納得しかけるが、ひとつも気になる点があった。

ピアノの上から吊り下げられている巨大な物体。

・・・リハーボール？

クラシックと落ち着いた感じの蔵からはとても調和されているとは思えなかつた。

僕のほかにも、先客が5名ほど居た。

蔵の中は薄暗いため、よほど近まで顔を寄せないと相手が誰なのかもわからない。

『あつ・・・』

僕はその相手に見覚えがあつた。

『 銀行の田部井さん・・・』

『 おっ、あんしん銀行の田原さんか・・・』

ライバル銀行との鉢合はせは予想していなかつた。

なのに、相手は落ち着き払つたように僕のことを見てい。

その目には何故か哀愁のようなものを感じる。

『 田原さんもつかまつちやつたか、お氣の毒に・・・』

聞けば、今日集まつたその他のメンバー全員が金融機関の面々なの
だと言ひ。

信用金庫、 信用組合、 生命、 損保・・・

地元金融機関はほとんど揃つてゐる。

これから怪しげな宗教勧誘よりも恐ろしい事が起つると、

銀行員のアンテナが受信しているん・・・

ほどなくして、ピアノ伴奏のもと、小村夫人のコンサートが始まつた。

『 Barr A waist curves こうじゆせん・・・』

外見の派手やかさとはちがい（失礼）その澄み切つた歌声は、プロ

級だった。

伴奏は夫、小村氏みずからが演奏している。

これほどの腕前を持つているのだ。自作を改造して披露するだけの事はある。

納得してこねうち瞬く間に2時間の時間が過ぎてこった。

『まあ、これで全てのプログラムは終了です・・・』

全員が立ち上がって拍手している。

その拍手は鳴り止まない。

通常であればアンコールを求めるものなんだけれども・・・

『続きまして、よひつじや顔を、『バー腰曲がり』へー。』

『はい?』

『ばーじつめがり?』

『あんしん銀行さん、これからが本番なんですよ・・・』

隣にいるのは信用組合さんだらうか?

心苦しい眼差しで僕を見ている。

よく見渡すと、氣の毒そうな顔をしてこるのは同じなんだ。

そして、ミラー・ボールが激しく回り出す！

ピアノが地下へと自動収納されると同時に、

巨大な液晶テレビとマイクが中央に登場した。

『・・・通信カラオケ？』

金融団の面々は、盛大な拍手で小村夫人を迎える。

『ああ、あんしん銀行さんも盛り上げてくれないと・・・』

促されるように拍手をもとめられる。

いつ着替えたのだろう、ますます派手な格好をして、『登場だ。

『今夜は朝まで行くわよおおおーーーーー』

小村夫人が吼える。

『いつも5時間くらいマイクはなさないんだ・・・』

田部井さんがそっと教えてくれる。

なんでもコンサートの後は、カラオケのワンマンショーが始まるんだとか。

なるほど、金融団ならば誰一人として文句も言えない芸者集なのだ。

「これほど都合の良いメンバーは他にはあるまい。

・・・蜘蛛の糸に引っかかった事に僕は気がついたのだった。

【Bar A waist curves】

日本語にすると、

【バー（飲み屋）腰曲がり】

老夫婦が趣味を披露する恐怖の館・・・

第5節 【Bar Awai st curves】(云々) (後書き)

この物語はフィクションです。

第6節 ワンダーフォーゲル伝

第6節 ワンダーフォーゲル伝

うちの銀行の大株主であり、地元でも有名な資産家である、田村五郎氏（62歳）。

毎月、高額な定期預金の満期がある為、支店長会同にて訪問している。

満期の度に、『景品はいつもので頼むよ・・・』と言つのが口癖であり、

その景品とは【洗濯洗剤】なんだ。

だから、支店の中では『アタック』といつ『コードネームで呼ばれている。』

資産家といつのは、不動産のあがりであるとか、株式の配当であるとか・・・

定職を持たずに、趣味の世界で暮らしている人が多い。

田村氏もそんな資産家の1人なんだけど、スケールが違う。

『いやあ、2週間の間に株価下がっちゃつてさあ・・・30億損しちやつたよ』

涼しげに笑つてゐるその表情からは悲壮感は微塵も無い。

大抵の金持ちは、それだけで十分破産しているんだけど……（汗）

そんな世界に生きる資産家の趣味の幅はとても広い。

骨董・絵画・写真・スポーツ・車・・・

あげれば切がないのだ。

その中でも、田村氏は特に写真が好きらしい。

自宅のいたる所に写真のパネルを飾っている。

支店にあるギャラリーでも展示した事がある。

『趣味を褒める』

営業マンならば基本中の基本だ。

そんなある訪問の日、僕は写真についてある事に気がついてしまつた。

『田村さん、写真はずいぶん山の風景が多いですね』

訪問のたびに、応接室に飾つてある写真が変わっている。

変わつてこるとこつ事は、『見てほし』の一言で済む。

これを『よこしよ』しない手はない。

『昔はワンダーフォーゲル部ですね。今でもこの地区的山岳会で山に行ってるんだ』

この話題は【当たり】だった。

今まで銀行員から、登山の話題には触れられた事の無かつた様だ。いつにもまして上機嫌な田村氏から、その日新たに大口預金を頂戴する事になった。

『いやあ。ありがとうございます。うちの支店は田村様でもつて、いよいよ支店長の『山』は天下一品だ。』

『支店長たちは登山なんてする事ないのかい?』

人生の山には常に挑んでいるけど、登山の経験など全く無い我々。

『実は来週の日曜日、月山の山開きがあるんだ。』

今年から私が山岳会会長だから、ビシビシ盛り上げなくてね。

どうだい?あんしん銀行のみんなで山に登つて見ない。気持ち良いよー。』

『もへ、是非お供いたします。支店全員で参加いたしますから。』

・・・支店長。成り行き上仕方ないけど、

僕はあなたが山頂までいけるかとても心配です。

登山家に『何故山に登るの?』と聞けば『そこには山があるから』と答えるだろつ。

銀行員に『何故山に登るの?』と聞けば『VIEPが登れって言つてるから』なのだ。

こうして、ワンダーフォーゲルの歴史に新たな1ページが刻み込まれた。

【あんしん銀行ワンダーフォーゲル部】結成。

僕と支店長、その他男性行員都合12名が月山岳山開き登山に出発した。

ちなみに女性行員は全員が参加しなかつた。

『・・・といつことで、全員で登山参加ねがいたい』

『・・・支店長、ヤクハラです』

『・・・・・・・・・・』

セクハラだろうが、パワハラだろうが、

それを面と向かっていえるあなた達はすげえことやつ。

【おつぽねーず】は無敵である・・・

7月1日。

登山当日は、初夏らしい爽やかな晴天に恵まれて絶好の登山日和だ。素人登山隊の我々と、山開きという行事もあり七号田までは車で移動したのだけれども、

『ここから4時間で頂上です。途中、ゴミを拾いながら登りましょう』

・・・なるほど。人数がいたほうがいいのは、これが目的か。

『アルピニストの野 健みたいだ・・・』

行員の何人かはきっとこう思つたはずだ。

山頂に近づくにつれて、下界の景色とは比べ物にならないほど絶景が広がる。

かつて山岳信仰で崇めた月山岳は、地元では『靈峰』として知られている。

いままでも白装束を纏つた集団が、修験として山頂を目指す。

何故昔の人人がこの山を『聖地』として選んだのか良くわかる気がする。

山頂に近づくと、天候は一変した。

濃いガスがかかり、視界は2~3メートルがやつと見通せる程度だ。

前を歩く人の背中を見失うと、僕以下後ろの連中全員が遭難してしまつ恐怖が沸き起つる。

『じつやら山頂は、厚い雲に覆われている状態だ。

『絶対に登山道からそれなによつて』

田村氏が我々を心配して声をかけてくれる。

山での田村氏はまさに『山野』であった。

年齢を感じさせない軽やかなフットワーク。

登山道や高山植物を知り尽くした知識。

清掃作業をしながら登る』ことがさほど苦痛ではなかつたのは田村氏のおかげであつた。

『やあ、田村さん。ずいぶん大勢でいらっしゃいましたね』

山岳会会長だけはある。清掃しながら登る我々を、

追い越していくほとんどの人が田村氏を知つてゐるのだ。

『やあ、これはこれは。今回あんしん銀行さんが助つ人で参加してくれて……』

最初は丁寧に説明していた田村氏。

けれども、あまりにも説明を繰り返しているうち面白倒になつた様子。

「やあ、会長。すいぶん大勢で……」

・・・シエルバです

僕達は荷物もとの山岳民族が

じうじゅせりの思ひ出山頂に到着した。

山頂は、三重信仰の靈峰らしく、祠が祭つてある。

予定時刻の30分前につくことができたのだから、素人集団の僕達にしたら上出来だろう。

いつしかあれほど濃かつたガスが薄れ始め、漆黒に近い蒼天の空が顔を出した。

『そこに山があるからつてわかつた氣がする・・・』

そう心から思つたんだ。

『あれ？ 田村さんほ

もうすぐ山開きの開会だというのに主役である田村氏が見当たらぬい。

・・・・・・・・・・・・・

すると、微かながら田村氏の声が聞こえてきた。

『・・・・・助けてくれ・・・・・』

『かつ会長ー、どうですかーーーーー』

なんと田村氏、突然の晴れ間にカメラを取り出し、

登山道を離れて高山植物の写真を撮りに行つたらしい。

山の天氣は変わりやすいのだ。次に何時雲が晴れるかわからない。

絶好のシッヤターチャンスと思つたのだらうけど・・・

『大変だー！怪我しているぞおーーーー』

岩場で転倒した田村氏は足を骨折して動けなくなつていていたのだ。

呆然と見送る我々を山に残して、救助の為にやつて來た、

『防災ヘリ』で田村氏は一人運ばれていつた。

『・・・・支店長。この『ミヅツ』あるんですか』

『・・・・銀行まで持ち帰るや、シェルパだろ？』

あんしん銀行ワンダーフォーゲル部。

結成初日、山頂にて遭難。

第6節 ワンダーフォーゲル伝（後書き）

この物語はフィクションです。

第7節 ゴルフ伝

銀行のV.I.P.顧客には、会社の経営者も多い。

成り上がりのワンマン経営者から、継承したボンボン一代目二代目。生え抜きの努力型社長など、経営者についてもいろんな『人種』が存在する。

それらのほとんどに共通しているのが、『ゴルフ』なんだ。

だから、『ゴルフ』は経営者にとって、『仕事』である訳で・・・。結果、僕達銀行員もゴルフを『仕事』のひとつにしなくちゃいけない。

大人の趣味とするならば、一日遊んで1~2万円。

決して嵩すぎる金額ではないし、パチンコや競馬をするよりよほど健全だ。

問題は、お付き合い程度の腕を習得するまで、個人的な練習が必要ということだ。

接待で行うゴルフは『経費』であるけれども、

練習で腕を磨くゴルフは、当然ながら自腹なのだ。

「今回のゴルフコンペは、田原代理も参加ね」

銀行主催の「ゴルフコンペはまさに『仕事』の王道。

参加を指示されれば、嫌でも参加しなくてはいけない『赤紙』なのだ。

銀行の「ゴルフコンペは、誰をどの様に組み合わせるかも非常に神経を尖らせる。

例えば、同業者のライバル同士を同じ組み合わせにしないだけじゃなく、

同じ組のメンバーのバランスも重要だ。

支店長と一緒に組と、僕のような『足輕』と一緒に組の場合、

「俺を馬鹿にしているのか！」

つて叫ぶ社長（馬鹿とも言つ）がいるからなのだ。

「あつ、田原代理の組は、この前の談合事件で検挙されたチームだから、

その話題は触れないでね・・・

・・・確かに、測量業界で談合事件が起きた事は記憶に新しい（汗）

間違つてもその話題には触れるわけが無いのだけれども・・・

「・・・ゴルフ参加している場合じゃないだろ？」

VIPの行動は、時に我々の常識を遥かに超える。

「ナイスショットー。」

「の掛け声は、「『んこちは』の挨拶と一緒にだ。」

実際ナイスショットじゃなくても、前に飛べはそいつ叫ぶ。

『足軽』の重要な仕事だ。

その他に、「カメラマン」「キヤーデイ」「宴会部長」も兼ねる。

その合間に、「ルフをプレーするのだが、これが下手だとVIP達を不快にさせれる。」

上手すぎても嫌味となりダメなのだけれども、

上手であればスコアの調整は可能であるが、

下手であれば調整なんて出来るわけがない。

だからそれなりの腕を持つ事は、銀行業務の知識を勉強するのと同じだ。

「田原君、なかなか上手くなつてきたじゃないか

「いやあ、社長のアドバイスのおかげです」

「ゴルフが仕事のV.I.P.達は、人に教えることを好む。

久しぶりのゴルフで、腕が戻るのでの前半では、

必ずこういった『教え魔』の洗礼をあびるのだが、

後半慣れてくるころ『御礼』が出来れば接待としては上出来だ。

アドバイス一つでゴルフが上手になれるのなら苦労はしない。

談合事件後、暗く沈んでいると予想していたこの組だったが、

全てを忘れているのか、忘れようとしているのか・・・

とても和やかにゴルフを楽しんでいるように思えた。

こうこうゴルフならば、『仕事のゴルフ』つていうのも悪くは無い。

そう思いながら、アウトスタートから中間地点にある茶屋で暫しの休憩。

「後ろの組は3人組だから早くやつてくる。休憩は早目に切り上げよう

ある社長がそう言つと、

「ああ、の中に 建設の社長がいるだろ?」

あれ五月蠅いから、茶屋で一緒になる前に切り上げよう

「じつもども癖のある社長が後ろの組にこもるやつだ。

「わい、オーナーは田原君だね。はじめてよ」

僕からのプレーとなり、ティーグラウンドで構えた瞬間。

「おーい、社長お・・・」

遠くから、あの五月蠅い社長が駆け出してやつてくる。
手にはお盆のような長細い器を持つてこられたが、
何を言つてこらのが闇をとめ事は出来ない。

「あーい、社長。『だん』『だん』『こらないかあーがつはまはま』

すさまじい轟音と共に現れた五月蠅い社長の手には、
先ほどの茶屋で売られていた『みたらし団子』と『すんだ団子』が、
売られていた器と一緒に抱えられている。

「うるせえ。俺達に今『だん』『だん』。まれキャラティセキモビリヤ

「アーッハハハ、皿こよ、だん』。まれキャラティセキモビリヤ

・・・そのつまらない駄洒落を言つたがために、

器」と全て購入してきた五月蠅い社長。

おやじギャグひとつにも金に糸田まつたない・・・

VIPの行動は、我々の常識を遙かに超える。

まさにその瞬間だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6557d/>

VIP達の福音書

2010年10月25日01時19分発行